

Sakurabito

さくらびと

佐野日本大学高等学校 同窓会 桜友会報
佐野日本大学中等教育学校

桜友会が発行する「さくらびと」は同窓生をつなぐ、コミュニケーション誌です。

tone-01- Doctor: Mika Kumakura

医師 熊倉 美佳

桜 × 美 × 音

__ 呼応するさくらの旋律 __

tone-02- Flutist: Kana Hagiwara

フルート奏者 萩原 可奈

| 仕事 × 情熱 |

Cactus creator / サボテン相談室代表
羽兼 直行 - Naoyuki Hagane -

NEXT CHALLENGE
- Yasuka Suzuki -

School Info.

桜友会 Message & 活動報告
SANICHI NOSTALGIC PHOTO CLUB

2016
Vol.04

一冊の本から始まる

プレリビュード

tone-01-
Doctor: Mika Kumakura



Photo : Akiko Oya

「幼い頃はそうでもなかったんですが、中学で佐日に入学した頃から図書館、そして読書が生活の一部になっていました」という熊倉さん。小学生の頃はどちらかというと算数が得意。国語は嫌いではなかったが、あまり興味をそそられなかったか。

「たしか最初はハリーポッターシリーズあたりから読みあたりだして。気がつけば、放課後は必ず図書館。常連中の常連になりました」

その言葉を証明するかのごとく、取材当日、撮影のため数年ぶりに図書館を訪れると司書の先生からあがった声は「熊倉さん！お久しぶり！」。まるでタイムラグを感じさせない。

「本を探したり読書もしましたが、ちょっとした勉強や調べもの。ただ座ってポーツとしていたこともあったかもしれませんが（笑）」

初めて意識した医師という仕事

そんな読書生活の中から、運命的な出会いがあった。

「見つけたのがこの図書館だったか市立図書館だったか…定かではないのですが、山本周五郎の『赤ひげ診療譚』を読んだときは忘れられません」



思い出の詰まった図書館で、インタビューに答える熊倉さん。

医師 熊倉 美佳

2005年度
高等学校卒業 40期生

物語の舞台は江戸時代後期。幕府が設立した小石川養成所に配属された青年エリート医師が「赤ひげ」の異名で呼ばれるベテラン医師に感化され、真実の人間愛に目覚めてゆくヒーロードラマ。黒沢明による映画化でも有名な作品である。



「世界観に引き込まれて映画も見ました。この作品と出会って初めて医師という仕事を意識したのかもしれない。医師を目指すとなるとそれなりの勉強量も必要になってきます。もともと負けず嫌いの性格もあって勉強は好きだったんです。医学部への進学は葛藤もありましたが、個人的な赤ひげ先生の医師としての生き方に、背中を押されたような気がしました」

いざ、目指せ医学部。しかし高校3年の三者面談で話は暗礁にのりあがる。

「目指していた関東圏の医学部が：ギリギリのラインだったんです。ダメなら他の学部、他の道：医師以外の職業も考え進路を練り直そうとしました。そんなとき、当時担任だった金子先生が『医師の道を優先することの方が大事なのではないか。医師を目指すのに、場所に関係ない。自分がどちらを優先したいのかを考えなさい』と言ってくれました。答えはすぐに出来ました。あのときの先生の言葉がなければ、今、私はまったく違う職業についていたかもしれません」

悩んで出した答えのかがいがあり、見事に現役で福岡県北九州市の産業医科大学に合格し、医師への道の入り口に立つことができた。さて、医学部での勉強はどのようなものだったのだろうか。

「こんなことを言ったら笑われるかもしれませんが、高校まで積み上げてきた様々な教科のすべての勉強が、ひとつも無駄にならないことに驚き

ました。数学、物理、化学に生物など、あらゆる分野、それどころか文系の外国語、国語、歴史、倫理…とにかくすべてです。勉強したことが無駄にならない気持ちよさを実感しました」

女性として、いつかは母親として

大学を卒業して医師へのスタートラインに立ち、様々な岐路が。

「自分は何科の医師になるのか、ということがまず大きな選択でした。麻酔科を選択した一番の理由は、麻酔科学の面白さに惹かれてです。また、自分が女性であることからワークライフバランスの良さも選択の一助になりました。当番であれば緊急手術で夜間呼び出されることも多い科であるため、他科に比べてスケジュールが組み立てやすい利点があります」

そんな熊倉さんのお母様は教師をしながら、彼女を含む三姉妹を育て上げたという。

「そういう母の姿を見ていたせいかもしれません。自分が将来、母になったときにも仕事を続けていきたいという思いがありました。麻酔科の先輩女性医師で、すでにお子さんがいらっしやる方がいるのですが、子どもへの対応は「さすが」のひとつことです。麻酔を怖がっていた子どもに優しく語りかけたり冗談を言ったりしてリラックスさせてしまおう…私はまだまだ足元にも及びません。心臓疾患のある小さな子どもでは大泣きが引き金となって重篤な状態になってしまうこともあるのでとても危険なんです。私もいつか母親に…母親ならではのという医師としてのアドバンテージに前向きでありたいです」

麻酔科と一口に言っても、そこからさらに専門分野があるらしく…

「小児麻酔、産科麻酔、心臓血管外科麻酔、緩和ケア、集中治療などといった具合に、麻酔科も

さらに専門分野に枝分かれします。オールマイティに様々な症例と向き合う道を選ぶか、専門分野を極めてそれを活かせる場を選ぶか…今のところ、まだ模索中です」

最後に後輩たちへ伝えたい思いや感じてほしいことは？

「まずは、勉強だけでなく様々なことに対して興味・関心を持ち、多くの経験をしてほしいということです。進学校であればあるほど勉強一筋になっただけですが、私は本を読んだり科学展等を見に行ったことが将来の志望を決めるきっかけとなりました。二つ目は、やりたいことに対して妥協せず自分を信じるということです。星野仙一氏の『迷ったら進め』の言葉のように、迷っているときは前に進みたい気持ちがあるときなので進んだ方がいい。私は進路選択で迷っているときに金子先生に背中を押されて進むことができたからこそ、今の自分があるのだと思います。医師になった今、自分の実力では進むことができるか不安になることもあります。自分の中にある『前に行きたい気持ち』に向き合って頑張っていくことと思います」

彼女の麻酔科医としての道は始まったばかり。しかし、そこから聞こえてくる激しい医療の現場に立ち向かう女性としての生の声は、美しい響きとなって未来の医療に流れ込みそうである。



Profile

1987年生まれ、佐野市出身。佐野日大中学校、佐野日大高等学校より産業医科大学を経て、現在、福岡県北九州市のJCHO九州病院麻酔科勤務。



公演後、佐野市文化会館エントランスにて。



桜 × 美 × 音

of Kana Hagiwara

フルート

取材当日は佐野市内の小・中・高校吹奏楽部や市民吹奏楽団が一同に会して行われた佐野市吹奏楽祭。第35回という節目に花を添えるべく、佐野の吹奏楽っ子憧れの彼女がゲスト奏者として駆け付け会場は大盛り上がり。吹奏楽祭始まって以来の動員数となった。「楽屋で少し休憩されてから…」の言葉を遮るように「アドレナリンがあるうちに！」とインタビューはその演奏直後に行われた。それにも関わらず疲れをまったく感じさせない言葉が続いた。

「私が初めてフルートを触ったのは小学1年生のときでした。3歳年上の姉が4年生で小学校の吹奏楽部に入部してフルートを始めたんですが、そのとき漠然と『私もいつかフルートをやる！』口のフルート奏者になる！』と思っていたのを覚えていません。根っからの負けず嫌いなんでね。姉ができるなら自分もできるはずだ、と(笑)。今日は私の後輩にあたる小学校の児童たちも演奏していたので感慨深かったです。始めた頃の気持ちを思い出してキュンとしました」

その後、中学でも吹奏楽部でフルートを担当。高校への進学にはこんなエピソードも…。

「私の生年月日は平成元年8月9日。その日、私の母は病院でラジオを聞きながら佐日野球部の

コンチエルト

甲子園の試合を応援していたそうです。「勝った」という声援が上がったあと私が産まれたんだとか。少し大きくなってからもテレビの前で「S・A・N・O・日大レッツゴー！」と大声で甲子園の応援をしていたことを思い出します。きつと縁があったのでしょうか」

入学後ももちろん吹奏楽部に所属。野球部が甲子園出場の際には部長を務め、甲子園で吹奏楽の指揮もした。

「子どもの頃から応援していたのでとても嬉しかったです。今でも応援曲マグナを聴くと演奏したくなります。2013年度のセンバツに佐日が出場した時は、どうしても甲子園で演奏したくなり、弾丸で甲子園に行き演奏してきました(笑)」

今につながる恩師との出会い

高校時代は甲子園での思い出と平行して、現在の師匠との出会いもあった。

「高校1年生の冬に吹奏楽部の顧問から日大芸術学部の冬期講習へ行くよう勧められ、そこで出会ったのが現在の師匠です。師が当時、桐朋学園大学の特任教授を務めていたため、同校への進学を決意しました。それまでは両親が教員ということもあり『きつと私も教員になるんだろな』と内心思っていたところがありましたので、この決断は私にとっては大きいものでした。高校3年の本格的な受験期が始まった頃、一人孤独に練習をしていると毎日担任の先生が部室に来て演奏を聴いてくださり、言葉をかけてくださったことも忘れられない思い出です。あれがなければ過酷な受験期を乗り越えられず、今の自分ではなかったと思います。師匠は60歳を超えた今でも、とても美しい音を出すのに研究をやめない、ものすごく探究心の強い方です。

フルートの魅力は、本当に様々な音の種類があ

tone-02-
Flutist : Kana Hagiwara



Profile

1989年生まれ、佐野市出身。3歳よりピアノ、9歳より小学校の吹奏楽部にてフルートを始める。17歳より自尾彰氏に師事。高校在学中、第8回栃木県吹奏楽ソロコンテスト高校生部門金賞、JBA関東甲信越支部第6回中学生・高校生ソロコンテスト高校生部門優秀賞。現在は桐朋学園大学時代の学友であるピアニスト・前島七葉子氏とのデュオ「Duo-leaf(デュオ・リーフ)」でユニークな演奏活動を精力的に行うかわら、石井竜也氏のアルバムや、CM音楽などへのレコーディングにも参加。プロのフルート奏者として活躍中。Duo-leafブログ <http://ameblo.jp/duo-leaf/>



るところです。私が使用している楽器はいわゆるヴィンテージ・フルート。ヴィンテージ・フルートこそフルートの本来のスイツと包まれる、また空気を振動させ、人の心に入り込めるような音が出せるのではないかと思っています。師の音に近づけるよう、素敵な音を求めて練習するのが楽しいのでしようね。だからフルートを続けられているのかもしれない」

演奏中は伝えたいものをダイレクトに音に込めるといふ彼女。練習中ではあしうこうしようと思案するものの、いざ本番になるとそのときのテンションと自分のやりたいことをそのまま出すという。さて、今後の展望は？

「不安定な職業のはずなのに、これまでやりたことがやりたいペースでできているので…こわいほどです。自分の音を追求しつつ、自分の演奏を求めてくれる方を幸せにできればいいですね。生涯なんらかの形で、フルートを吹き続けていることが目標です」

2007年度 高等学校卒業 42期生

萩原 可奈 フルート奏者

仕事 × 情熱

カクタスクリエイター
サボテン相談室代表

羽兼 直行

[1966年度 高等学校卒業1期生]



PROFILE

1948年生まれ、群馬県桐生市出身。日本大学芸術学部美術学科卒業から約23年間、CMディレクターとして多くのCM作品を演出。2000年、恵比寿に日本初のサボテン専門店をオープンさせる。館林ファームではズラリと並んだ温室の中で多品種のサボテン・多肉植物を栽培し流通させる。サボテン栽培に関するテレビ・ラジオ出演、著書も多数。近著は『はじめての多肉植物』（主婦の友社・刊）。NHK趣味の園芸、解説委員を務める。

サボテンとの出会いは小学生の頃。お父様から一鉢のサボテンを譲り受けたことが始まり。

「あまり手をかけずともちゃんと育つてくれ、手をかければかけただけ応えてくれるところに惹かれました。桐生にある大人しか在籍していないサボテン倶楽部に所属して、月1回自分が育てたものを持ち寄って自慢しあったり、他県の倶楽部と交流会をしたりと、大人の中に子どもが一人ポツンと入ってやっていましたね（笑）」

小さい頃から絵を描くのが好きで、将来は絵描きになりたいという夢をもっていた羽兼さん。

「日大の芸術学部というのはかなり優秀なんだ、と中学の美術の先生が教えてくれたんです。その日大の付属高校が来年、佐野にできるから行って

みれば？…と、まあ、そういう流れで佐日を知りました」

記念すべき一期生として入学した羽兼少年。高等学校同窓会の和田栄一会長とは同窓になる。和田会長によると…

「入学式は露天、校舎はアレハブ。生徒みんなで野良作業：手作りだよ。生徒会もないから、羽兼が浦田先生に呼ばれて生徒代表みたいな事もやってたよね。生徒会長が出来る前の生徒会長。みたいなことをしてたんだよ（笑）」（和田会長談）



なんとも微笑ましい、しかしどこか輝いて感じられる佐日創成期談である。

「和田もそうだけど、一期生はとにかく個性的な面々が多かったですよ」

「個人的」で思い出深い高校時代を経て日大芸術学部に入學。だが時代は学生運動の暴風雨の中にあつた。

「日芸は全学部の中でも一番運動が激しかった事もあり、学校の中より外へ意識が向かっていったのだと思います。在学中に電通でアルバイトをするようになって、そこでの先輩のサジェスションで自分はテレビの世界、しかもよりクリエイティブティの高いテレビCM制作の現場がいいのではないかと」

CMディレクター時代は1年の3分の1を海外ロケで過ごすような多忙な日々。しかし継続してサボテンの栽培は行い、海外ロケの際は珍しい品種を探し求めたり、種を確保したりでサボテンへの思いは続いていた。

「40歳を目安にCMディレクターの仕事は辞めたいと思っていました。でも様々

なしがらみの整理がついて完全に仕事を終わらせることができたのは50歳の頃です。その間、海外で見つけた面白い雑貨の店を出してそこにサボテンのコーナーを作ったんですが、これがウケまして。雑貨よりサボテンがどんどん売れるわけです。その後、恵比寿に日本で初めてのサボテン専門店をオープンさせました」

戦前戦後はどちらかというと、渋い初老の男性たちがマニアックに語らうサボテンの世界だったが、羽兼さんは幼い頃から培った知識とアーティスティックなクリエイティブティを融合させ、サボテンを一気に「お洒落でスタイリッシュなもの」へと開花させた日本での祖ともいえる。

「仕事においては、ゼロから形にしていることに喜びをおぼえ、それがすべての情熱につながっていきます。それはCMディレクター時代から今でもまったく同じですね。模倣はしない。模倣のつもりはなくても似てしまうことがありますから、最初のスタートはゼロからじゃないとしようがない。オリジナリティを最優先です」

現在は世界でも珍しい多肉植物『エケベリア』の専門書を執筆中。栽培・流通関係はもちろん、こうしたサボテン・多肉植物の普及活動にも積極的に取り組んでいきたいと語る。仕事へ、サボテンへの情熱はつづけることがなさそう。



サボテン相談室 本店

〒374-0028 群馬県館林市千代田町4-23
Tel. 090-9340-8711
Fax. 0276-75-1120

【年中無休、9時～17時】
東武伊勢崎線館林駅から徒歩5分
ホームページアドレス
<http://sabotensoudan.jp>



Sakurabito NEXT CHALLENGE

「人間、やればできる」今いる環境で
学び続けることが、次の挑戦を生むベースに!

「自分の知らない環境に身を置いて、自分がどれだけできるかを試してみたかった」という鈴木さん。地元に近い県立大学も合格していたが、あえて防衛医大への道にチャレンジした。

卒業後は幹部自衛官となるが、看護学科では看護師と保健師の資格を取得し、看護師たる幹部自衛官であるところの「看護官」を目指す。そのため、看護の勉強の他、規律正しい集団生活・礼儀作法の徹底や、各種訓練も行われる。大学生活と同時に始まった寮生活は、仲間との絆が深まり、勉強にも良い影響を与えている。

「高校時代は、今とは正反対でした」と笑う鈴木さんだが、自身を変えるきっかけがあった。訓練でのノルマ「腕立て伏せを2分間で20回」が、どうしても12回

までしかできず、自分には何が足りないのか、やり方はどこが間違っているのか…精神面、体力面の両方から自己分析し、今では32回こなせるようになった。「自分の限界を知ることで、伸びることができる」…そう実感した出来事だったと振り返る。

姉の妊娠・出産を通し、入学当初は産婦人科の看護師を考えていたものの、自身の怪我の経験や、様々な診療科の看護を学ぶにつれ、自分がどういう看護士を目指すか模索の段階に入っているという。「防衛看護学科」など、他の看護科では学べない防衛医大ならではの科目も最近始まった。自分はこの先、何に携わりたいのか、どんな看護師になりたいのか。自分の環境、経験、学び、すべてを動員して、最終的な目標地点を見つけることが次への挑戦だ。



YASUKA SUZUKI

鈴木 寧夏さん [2013年度
中等教育学校卒業 1期生]

1995年生、埼玉県幸手市出身。平成26年4月に新設された防衛医科大学校看護学科の2年生。卒業後は幹部自衛官(看護官)として任務にあたる。

防衛医科大学校ホームページ <http://www.ndmc.ac.jp>

| Sakurabito School Info. |



陸上競技部 [駅伝]

全国高等学校駅伝競走大会出場! (3年連続16回目)
京都西京極陸上競技場で開催された第66回全国高等学校駅伝競走大会に北関東代表として出場。桜色のランナーが激走! 昨年を大きく上回る38位でゴールテープを切りました。



剣道部 [男子]

インターハイ出場! (3年連続3回目)
和歌山県で行われた第62回全国高等学校剣道大会に出場。惜しくも予選で敗退しましたが、晴れの舞台で桜剣士たちが躍動してくれました。



ラグビー部 [女子]

U18花園女子15人制に選出!
全国から選抜された高校生女子選手が東西に分かれて対戦するラグビーガールの晴れ舞台、「U18花園女子15人制」。その代表に高等学校2年の久保光里選手が選ばれました。



デジタル放映部

NHK杯全国高校放送コンテスト準優勝!
第62回NHK杯全国高校放送コンテストの「創作テレビドラマ部門」で、中等教育学校デジタル放映部の「1%の絶望」が準優勝に輝きました。



馬術部 [国体]

わかやま国体 馬術競技準優勝!
第70回国民体育大会2015紀の国わかやま国体の少年団体障害飛越競技で、中等教育学校6年生の鶴見菜月さんと3年生の鶴見柚葉さんが準優勝に輝きました。今回は初めて姉妹での受賞となりました。

.....〈佐野日本大学学園の系列図〉.....



桜友会 活動報告

同窓会チャリティーゴルフコンペ開催!!



平成27年5月1日に太田双葉カントリークラブ、平成27年11月6日に足利カントリークラブ 飛駒コースにて開催されました。次回も多くの皆さんの参加をお待ちしております。

母校を訪ねる会

平成27年10月31日、卒業して10年目・20年目・30年目の卒業生が集まり、第22回母校を訪ねる会(実行委員長 横田 誠第29期)が開催されました。先生や仲間との懇談や施設見学を行い、懇親会には懐かしい「購買のパン」や「満福食堂のからあげ」などが用意され参加者は学生時代を思い出しながら舌鼓を打っていました。



同窓会館をご存知ですか?



〔三轟山みどり明るく 望みあり/佐野わが母校:卒業から50年近くたった今でも胸を熱くする母校の校歌。同窓会の行事では必ず参加者の皆さんと声高らかに斉唱しています。〕

皆さんは母校に「同窓会館」があることをご存知でしょうか。
約10年前、学園の創立40周年記念事業のひとつとして竣工された講堂兼総合体育館「ニザ40」の一角に同窓会館があります。同窓会行事の開催や定例の役員会を開催する場所として今や同窓会事業の拠点となっている場所です。また、同窓会行事以外の時間には授業でも使用され、在校生たちの学びの場としても大いに活用されています。
卒業してから母校を訪問したときに居場所がない

気がして、ちょっと寂しい思いをしたという方も少なくないのではないのでしょうか。同窓生が自由に利用できる、語り合ひ、くつろげる場所が欲しいという要望に応え、同窓会からの寄付と学校の配慮によりつくりあげられたのがこの「同窓会館」です。皆さんが母校を訪ねた折にはどうぞ同窓会館を利用してください。今も母校には、皆さんの居場所があるのです。
同窓会の目的は会員相互の親睦、向上を図り、母校の発展に寄与することです。同窓会は「新春のつどい」、母校を訪ねる会、「ゴルフコンペ」や現在11ある支部活動など、卒業生同士の絆はもろろん、卒業生と母校の絆にもなれるようにさまざまな行事を開催しています。是非ご参加いただき、現在の母校を感じ、懐かしい先生や青春時代をともに過ごしたかけがえのない仲間たちと語り合っていたきたいと思えます。
今年も多く卒業生たちの笑顔と一緒に校歌を声高らかに歌えることを願っています。

高等学校同窓会 会長 和田栄一

同窓会行事予定[平成28年→平成29年]

平成28年

- 5月初旬 第35回 チャリティーゴルフコンペ
- 6月25日(土) 第23回 母校を訪ねる会(文化祭)
- 10月初旬 第36回 チャリティーゴルフコンペ

平成29年

- 1月21日(土) 平成29年 同窓会総会
- 【会場】 ホテルサンルート佐野 栃木県佐野市朝日町702-27 TEL.0283-24-5000
- 第21回 新春のつどい
- 第9回 還暦を祝う会

みなさんのご参加をお待ちしております

いつでも、どこでも、
最新情報をチェック

同窓生の活躍や、活動報告などを
「ホームページ」や「facebook」で発信しています。



<http://www.sanichi.info/>



<https://www.facebook.com/maru.sano.0>

同窓会
ホームページ



同窓会
facebook



タブレット・スマートフォンからは、上記QRコードよりご覧になれます。

同窓会支部紹介

- | | | |
|-----------------------|------------------------|------------------------|
| 1. 佐野支部 支部長 早川郁雄(7期) | 5. 古河支部 支部長 赤坂幸広(11期) | 9. 太田支部 支部長 黒田雪久(3期) |
| 2. 安蘇支部 支部長 吉原史典(7期) | 6. 学園支部 支部長 湯澤輝雄(1期) | 10. 足利支部 支部長 吉田 仁(10期) |
| 3. 館林支部 支部長 奈良与志則(4期) | 7. 宇都宮支部 支部長 平野一昭(10期) | 11. 栃木支部 支部長 亀田 智(13期) |
| 4. 埼玉支部 支部長 大島正勝(6期) | 8. 桐生支部 支部長 川嶋伸行(8期) | |

未来へ

薄紅色の花びらが 一陣の風に運ばれ
手の中にはらりと舞い落ちた

十年前と変わらぬこの場所
同じ桜の下で

花弁と戯れる我が子を見て
私は遠い日に思いを馳せる

何もかもが目新しく
何もかもが輝いていて

自分の手の届く範囲が全てだったあの頃
学友と学びあい 笑いあい 支えあい

周りから守られてきた
そのありがたさをわかろうともせずに
一人で生きていると強がっていた

でも 今はわかる

私も大切な人たちを守りたい
愛すべき存在をこの手に抱き

橙に染まり 稜線に沈みつつある夕日を眺める
今私が見ているこの風景は

この子の瞳にどう映っているのだろう
この風景を子どもたちを

私たちは守っていかねばならない
これからも未来が 輝かしいものであるように

SANICHI NOSTALGIC PHOTO CLUB

TEXT:Aya Saito PHOTO:Akiko Oya

Information

同窓会からのお願い

「Sakurabito」を読んでいた卒業生の皆様へ。同窓会では同封の振り込み用紙にて「同窓会年会費：3,000円」の納入を受け付けています。この同窓会報も皆様の会費によって発行させていただいております。卒業生の皆様にとって「再会」の場所となる同窓会に今後ともご協力をお願いいたします。



※デザインは変更になる場合があります。

編集後記

「Sakurabito Vol.04」はいかがでしたでしょうか？ 号を重ねる毎に佐野日大での思い出を1つでも思い起こしていただければ幸いです。

今回は「桜×美×音」というキーワードを掲げ、女性のさくらびとにスポットを当てた号でした。医療に音楽、そして自衛官という多岐に渡る職業で活躍する彼女たち。職種は違えど、皆何かしらの夢や憧れを持って前に進もうとしている姿が印象的でした。

そんな彼女たちの想いが呼応し合い、この同窓会報Sakurabitoを通じて多くの人たちに心地よい音色となって届くことを願っております。最後に、発行にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

卒業生の働く会社・店舗などの情報を募集しています！**自薦他薦を問わず随時募集中！**
■受付はコチラ → sakurabito@sanonihon-u-h.ed.jp

QRコードからも
アクセスできます



■同窓生の交流が深まる同窓会公式 **facebook** 「佐野日大同窓会」で検索、アクセス！

※皆様からいただいた卒業生の情報は、Sakurabito編集室にて検討のうえ掲載させていただきます。掲載されない情報もごまごまを予めご了承ください。

注意事項

本誌掲載の個人情報、同封の振り込み用紙へ記入していただいた個人情報は、本人の同意なく開示することはありません。また、私たち佐野日本大学高等学校・中等教育学校及び同窓会ではその他の勧誘、ハガキの郵送は一切行っておりません。よって、出版社等を名乗る会社等から情報提供または代金振込みのハガキが届いた場合は、破棄していただくようお願いいたします。※誤って情報を提供してしまった場合、転売などの二次被害の恐れもあります。くれぐれもご注意ください。

本校卒業生に対する振り込み詐欺(オレオレ詐欺)被害にあわぬよう十分にご注意ください。未遂を含め複数件発生しています。

Sakurabitoとは、 「桜でつながる、人と人」母校のシンボルである「桜」と共に世代を超えた同窓生「人と人」がつながり合う同窓会報として新しく生まれました。桜の花びらと一緒に表現されたつながり合うタイトルロゴは「再会」を表現し、私たちが過ごした母校の「現在・過去・未来」が詰まったコミュニケーション誌です。

Sakurabito 2016 Vol.04

発行 佐野日本大学高等学校 同窓会
佐野日本大学中等教育学校
〒327-0192 栃木県佐野市石塚町2555番地
TEL.0283-25-0111 FAX.0283-25-0441
<http://www.sanichi.info/>



印刷 秋栄堂印刷株式会社
〒327-0843 栃木県佐野市堀米町3857番地
TEL.0283-23-1230 FAX.0283-23-1127
<http://www.syueido.co.jp/>